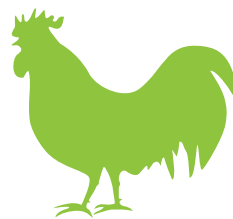


鶏肉

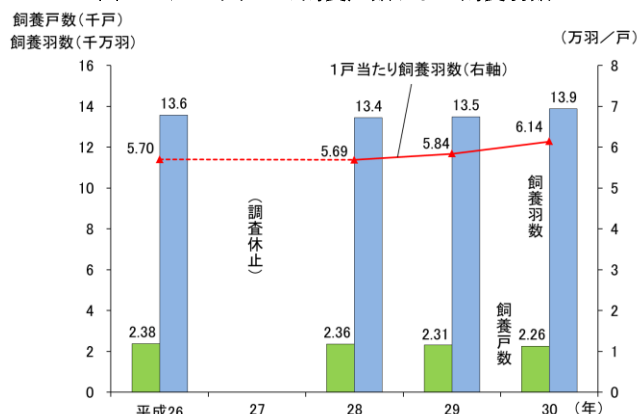


◆飼養動向

30年2月現在の1戸当たり飼養羽数、5.1%増加

ブロイラーの飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に減少傾向で推移しており、平成30年は2260戸（前年比2.2%減）となった。一方、同年のブロイラーの飼養羽数は、1億3877万6000羽（同2.9%増）と前年を上回った。この結果、1戸当たりの飼養羽数は前年から3000羽増加して6万1400羽（同5.1%増）となった（図1）。1戸当たりの飼養羽数が、前年に引き続き増加している要因として、小規模農家の廃業や大手企業によるインテグレーションの進展などにより、生産の集約傾向が強まっているためとみられる。

図1 ブロイラーの飼養戸数および飼養羽数



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：各年2月1日現在。なお、30年は概算値。

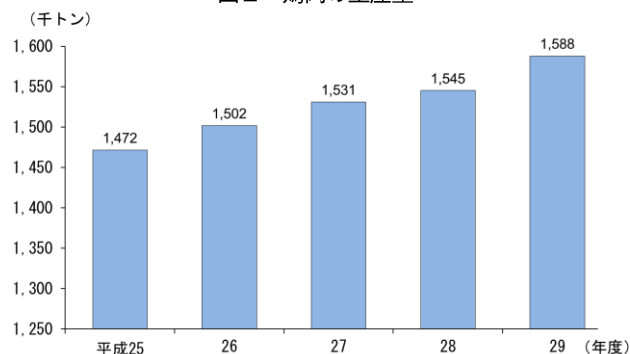
2：平成27年は世界農業センサスの調査年のためデータなし。

◆生産

29年度の鶏肉生産量、7年連続増加で過去最高を更新

鶏肉の生産量は、品種改良や飼料改良による増体成績の向上、大規模生産者の増加、消費者の根強い国産志向・健康志向などを反映して、増加傾向で推移している。27年度は、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な消費を受けて、153万1099トン（前年度比1.9%増）と前年度をわずかに上回った。28年度以降もこの傾向が継続し、28年度は154万5177トン（同0.9%増）、29年度は158万8154トン（同2.8%増）といずれも前年度をわずかに上回り、29年度は過去最高を更新した（図2）。

図2 鶏肉の生産量



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、「食料需給表」より農畜産業振興機構推計
注：骨付き肉ベース。

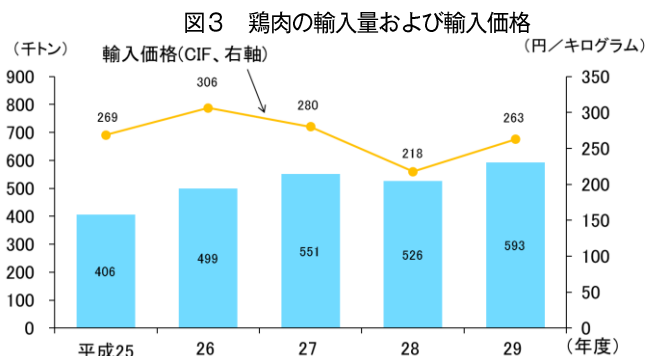
◆ 輸 入

29年度の鶏肉の冷凍品輸入量、過去最高

鶏肉

鶏肉の冷蔵品は消費期限が短いことから、輸入品の大半は主に加工・業務向けに利用される冷凍品である。

冷凍品の輸入量は、平成27年度は、国産鶏肉の相場高や、輸入価格（CIF価格）の低下などから、55万881トン（前年度比10.5%増）と14年ぶりに50万トンを超える水準となった。28年度は、引き続き輸入価格が低下したことなどから、52万5764トン（同4.6%減）となった。29年度は、輸入価格が比較的低下水準だったことに加え、加工・業務用向けの需要が高かったことから、過去最高の59万3036トン（同12.8%増）と3年連続で50万トンを超え、高水準となった（図3）。



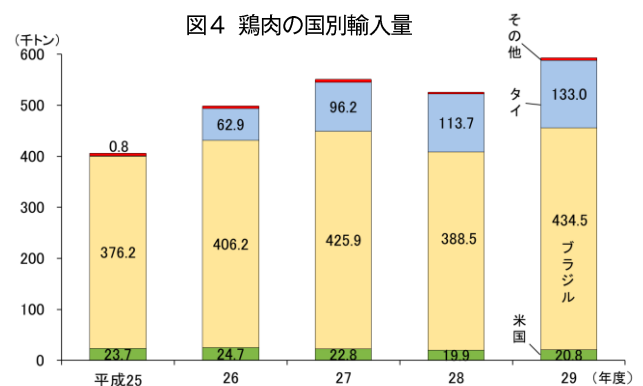
資料：財務省「貿易統計」
注1：実量ベース。
2：生鮮、冷蔵品を除く。

冷凍品の輸入量を国別に見ると、ブラジルが全体の約7割を占める最大の供給国であり、タイ、米国がそれに続く。

ブラジルからの輸入量は、28年度は中国からの引き合いが強まり日本向け輸出量が減少しており、29年度に入り日本国内の堅調な需要により輸入量が回復したことから、29年度は43万4458トン（同11.8%増）と前年度をかなり大きく上回った。

タイからの輸入量は、2016年1月の高病原性鳥インフルエンザ発生に伴う輸入停止措置が25年末に解除となって以降、急増している。29年度は、前年度に続き好調な輸出需要を背景に現地生産者の増産意欲が高かったため、13万3030トン（同17.0%増）と大幅に増加した。

米国からの輸入量は、クリスマス需要向けなどの骨付きもも肉が多くを占めている。17年度以降、高病原性鳥インフルエンザ発生の都度、発生州に対し輸入停止措置が取られている。29年度は日本国内の堅調な需要を背景に、2万844トン（同4.6%増）とやや増加した（図4）。

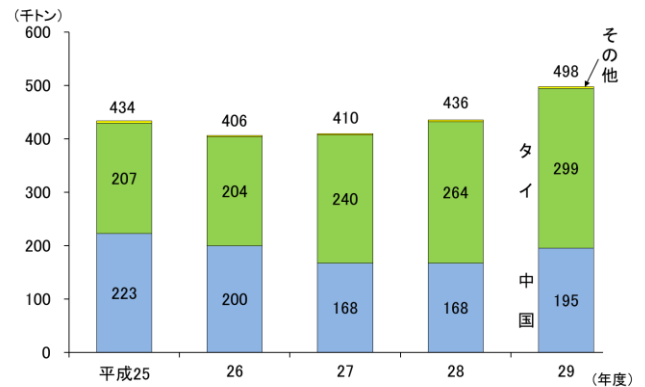


資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

鶏肉調製品

鶏肉調製品（加熱処理された唐揚げ、焼き鳥、チキンナゲットなど）の輸入量は、近年、食の外部化（外食、中食など）の進展や主要輸入相手国での高病原性鳥インフルエンザの発生による鶏肉輸出停止からの調製品への切替などを背景に、増加傾向で推移している。鶏肉調製品は、主に加熱処理施設が多数存在する中国、タイから輸入されており、平成27年度の総量は、前年度並みの40万9641トン（前年度比0.8%増）となったが、中国の「消費期限切れ鶏肉」問題の影響もあり、中国産からタイ産へのシフトが顕著となった。28年度は、中国からの輸入量は前年度並みで推移した一方、タイからの輸入量が増加し、43万5544トン（同6.3%増）となった。29年度は日本国内のサラダチキンなどをはじめとした鶏肉調製品の需要拡大に伴い中国からの輸入量は19万5242トン（同16.5%増）、タイからの輸入量は29万9005トン（同13.2%増）となり、鶏肉調整品全体では49万7671トン（同14.3%増）と過去最高を記録した（図5）。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」

注：1602-32-290（基本関税率8.0%、但し、WTO加盟国（中国）は6.0%、EPA締結国（タイ）は3.0%）。

◆消費

29年度の推定出回り量、3年連続で200万トン超え

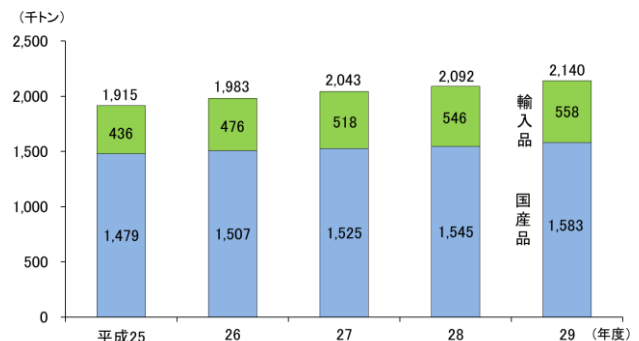
鶏肉の推定出回り量は、近年、他の食肉に対する価格優位性に支えられた需要増大や消費者の健康志向などを背景に、増加傾向で推移している。

全体の約4分の3を占める国産品は、国産品が大半を占めている家計消費が好調なことから、増加傾向で推移しており、平成29年度は158万2809トン（前年度比2.4%増）と過去最高となった。

一方、輸入品は、消費者の経済性志向や加工・業務用需要の高まりから輸入量が増加したことにより、27年度は51万7608トン（同8.7%増）とかなりの程度増加し、28年度も54万6361トン（同5.6%増）とやや増加した。29年度も引き続き輸入量が増加したことから、55万7589トン（同2.1%増）とわずかに増加し、3年連続で50万トン台となった。

その結果、29年度の推定出回り量は、214万398トン（同2.3%増）と3年連続で200万トンを上回った（図6）。

図6 鶏肉の推定出回り量

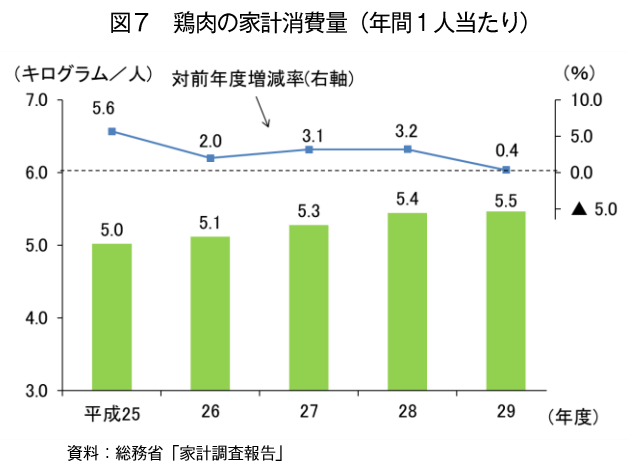


資料：農林水産省「食鳥流通統計」、財務省「貿易統計」より
農畜産業振興機構で推計

注：実量ベース。

家計消費

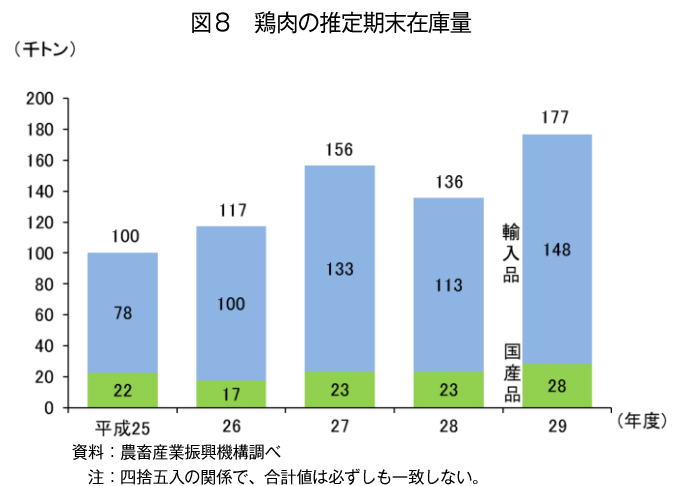
鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、他の食肉に対する価格優位性や消費者の健康志向を反映し、平成27年度は、年間1人当たり5.3キログラム（前年度比3.1%増）、28年度は同5.4キログラム（同3.2%増）、29年度は同5.5キログラム（同0.4%増）と増加傾向で推移している（図7）。



◆在庫

29年度の推定期末在庫量、30%増加し過去最高に

鶏肉の推定期末在庫量は、その8割以上を輸入品が占めることから、輸入量の動向に大きく左右される。平成27年度は、出回りが好調に推移した一方で、需要を上回る高水準の輸入量となったため、15万6444トン（前年度比33.3%増）と大幅に増加した。28年度は、前年度の反動により、13万5759トン（同13.2%減）とかなり大きく減少した。29年度は、国産鶏肉生産量の増加やブラジルからの輸入量増加に伴い、17万6552トン（同30.0%増）と大幅に増加し、過去最高の在庫水準となった（図8）。



◆卸売価格

29年度の鶏肉卸売価格、むね肉は上昇

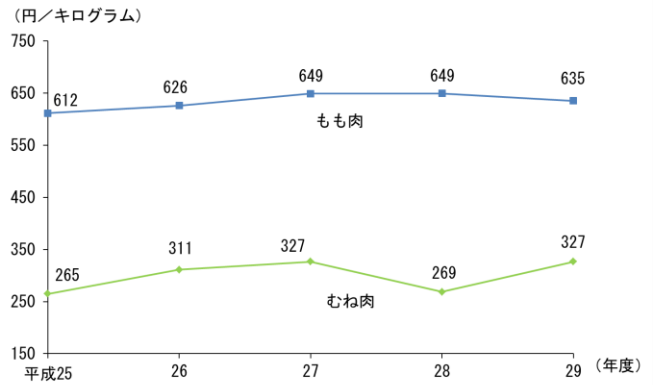
国産鶏肉の卸売価格（ブロイラー卸売価格・東京）のうち、主にテーブルミートに仕向けられる「もも肉」については、平成27年度は他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な消費を受けて、1キログラム当たり649円（前年度比3.7%高）とやや上昇した。28年度は、後半に輸入量が減少し、供給がタイトになったことを受けて、同649円（同0.1%高）と前年度並

みとなった。29年度は、在庫の積み増しを背景に同635円（同2.2%安）と5年ぶりに前年度を下回った。

一方、蒸し鶏などの総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用の多い「むね肉」は、27年度は加工・業務用需要の増加により、同327円（同5.0%高）と上昇し、28年度は高水準に積み上がった在庫を背景に、同269円（同17.8%安）と低下した。

29年度は、サラダチキンを中心に好調な需要により、引き合いが高まり、同327円（同21.5%高）となった（図9）。

図9 国産鶏肉の卸売価格



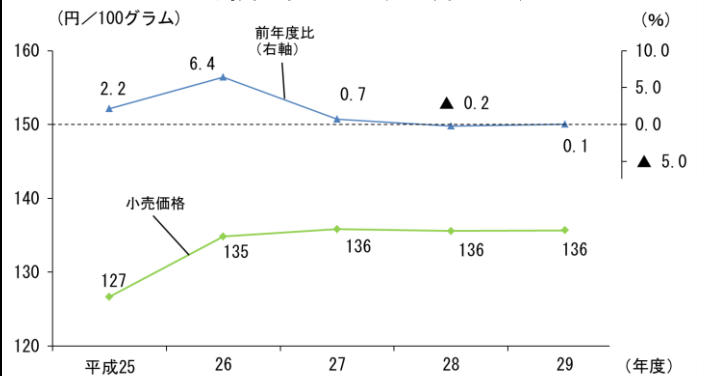
資料：農林水産省「食鳥市況情報」
注：消費税を含まない。

◆小売価格

29年度の小売価格（もも肉）、横ばい

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、平成27年度は他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な需要を反映し、100グラム当たり136円（前年度比0.7%高）とわずかに上昇し、28年度は同136円（同0.2%安）と前年度並みになった。29年度は同136円（同0.1%高）と前年度並みになった（図10）。

図10 鶏肉の小売価格（もも肉・東京）



資料：総務省「小売物価統計調査報告」
注：消費税を含む。税率は平成26年4月1日から8%、それ以前は5%。